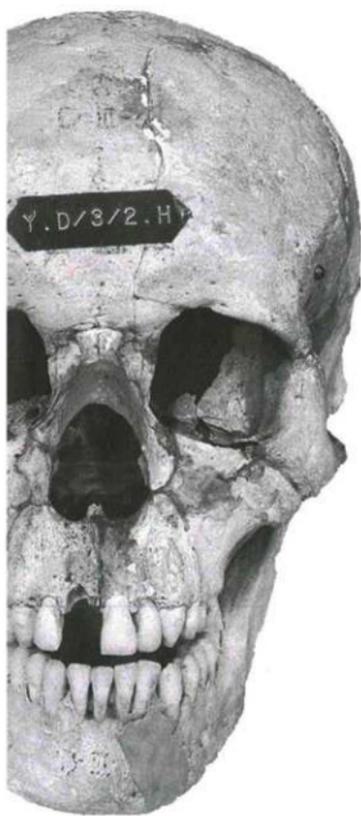
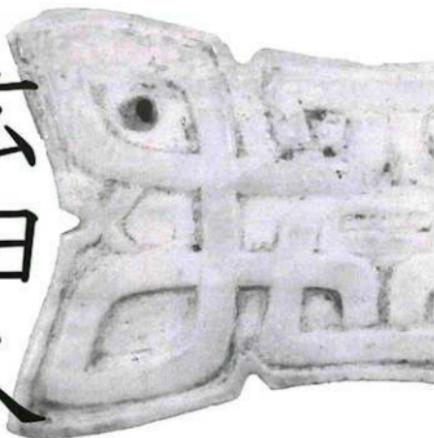


令和2年度 地域の特色ある埋蔵文化財活用事業
広田遺跡ミュージアム 開館5周年記念企画展



廣田人
と貝装飾

廣田遺跡出土品里帰り展



2020

10.24-
12.20

DIII地区2号人骨（資料所蔵：九州大学総合研究博物館）
下層貝符（国重要文化財：鹿児島県歴史・美術センター審明館）

広田遺跡ミュージアム

〒891-3702
鹿児島県鹿毛郡南種子町中之上2793-1
Tel. 0997(26)1111 mail: hirotam@hop.ocn.ne.jp

はるかむかし、そこには白い貝で身を装う人たちがいました。
 海のみえる砂丘のうえに、その人たちのお墓はつくられました。
 広田遺跡が発見されて半世紀がたちますが、どんな人たちだったのか、どこ
 に住んでいたのか、どのような生活をしていたのか、一緒に埋葬されていた
 貝製品や土器を含め、その多くは謎につつまれています。
 その謎を解明するため、たくさんの調査・研究がなされています。久しぶり
 に里帰りした広田遺跡出土品とともに、最新研究で少しずつみえてきた広田
 遺跡の謎をご紹介します。

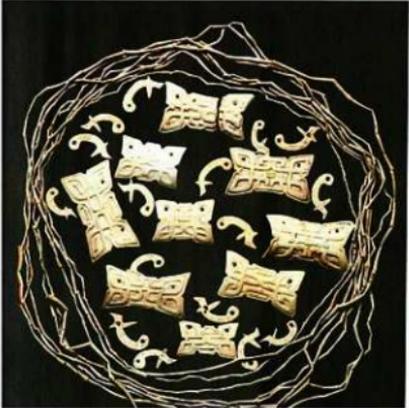


DⅢ地区2号墓 人骨

成人男性。1万点以上の貝装飾を身にまとい、取り囲むかのように周りにも墓がつくられており、男女双性の特徴をもつ特別なシャーマンではないかと言われています。

DⅢ地区2号墓 貝製品

下層貝符や竜はいなど緻密な装飾が施された貝製品が多く副葬されていました。



C地区8号墓 人骨

熟年男性。オオツツノハ貝輪やマクラガイ玉などを副葬。頭骨の陥没痕のほか、骨折や変形性関節症などの痕跡が残っていました。

DⅠ地区5号墓 貝製品

オオツツノハ貝輪を左腕16点、右腕17点の合計33点身につけて埋葬されていました。そのほか、異型タイプの貝符や玉類のほか、犬牙製装身具も副葬されていました。



山字貝符

発見当初、日本最古の文字として新聞等で大きく話題になりました。現在もその文様が「山」字であるのが明らかになっていません。



広田遺跡は
謎だらけ！

広田遺跡の最新研究紹介

プロジェクト **始動！**

3～7世紀の琉球列島における人と文化の交流史研究（注1）H29（2017）年度

・**広田遺跡の謎を解明せよ**・

遺跡が発見され、50～60年の歳月た
いまだ謎は多く残されています

—— 今回、3つの視点から謎の解明に挑む

プロジェクトリーダー

 木下 尚子
熊本大学文化科学研究部長 教授

プロジェクトコード：人骨

2017年度調査で出土した人骨のDNA解析を行う

 木下 尚子
九州大学大学院文化科学研究科 教授

 木下 尚子
九州大学大学院文化科学研究科 教授

 木下 尚子
九州大学大学院文化科学研究科 教授

 木下 尚子
九州大学大学院文化科学研究科 教授

プロジェクトコード：土器

電子顕微鏡で調べた土器の成分は九州列島に由来する

 高橋 隆太郎
熊本大学文化科学研究科 准教授

 高橋 保信
熊本大学文化科学研究科 准教授

プロジェクトコード：土器

電子顕微鏡で調べた土器の成分は九州列島に由来する

 高橋 隆太郎
熊本大学文化科学研究科 准教授

 高橋 保信
熊本大学文化科学研究科 准教授

 高橋 保信
熊本大学文化科学研究科 准教授

プロジェクト発信

プロジェクトは公開形。調査結果を広く発信する

 高橋 隆太郎
熊本大学文化科学研究科 准教授

広田遺跡の謎を解明せよ
この謎を解明したいのか？
この謎を解明できるのか？
この謎を解明する価値はあるのか？

広田遺跡の人たちはどこに住んでいたのか？ どうしてたくさんの貝製アクセサリーを身につけていたのか？ どうやって作っていたのか？ 発見・発掘調査されてから60年以上経った今も広田遺跡には多くの謎が残されています。こうした謎を明らかにするため、これまで多くの調査研究が行われてきました。

その最新研究である、木下尚子氏（元熊本大学教授）をリーダーとした研究プロジェクト「3～7世紀の琉球列島における人と文化の交流史研究（注1）」を紹介します。

プロジェクトメンバーは「人の形質・技術・移動」をテーマに人骨班・貝殻班・土器班に分かれ、調査研究を行いました。また、令和元年度はその研究内容や成果について講演いただきました。



（注1）科学研究費基盤研究(B)
17H02416「3～7世紀の琉球
列島における人と文化の交流
史研究」(H29～H31/R1年度)



♪ 広田は続くよ、
どこまでも♪

— 広田遺跡研究の継承 —

木下 尚子

広田集落の長田茂さんと坂口喜成さんが広田遺跡を発見したのが昭和30年、それからはや65年がたちました。この間、広田遺跡では都合5次の発掘調査が行われ、168体の人骨と4万5千余点の貝製品が出土しました。遺跡の内容が発掘報告書で公開されると、その重要性が認められ、出土した遺物は国の重要文化財に、遺跡は国の史跡となつて、いまや広田遺跡は町・県を越え、国民共通の財産になっています。現在遺物は広田遺跡ミュージアムと鹿児島県歴史資料センター黎明館、人骨は九州大学総合研究博物館と南種子町に保管され、遺跡は史跡公園として公開されています。

広田遺跡の遺物と人骨の数は膨大で、広田人の姿や生活を復元する研究はまだ途中です。幸い平成29年から3年間、広田遺跡研究に国の科学研究費が付与され、気鋭の若手たちが中心となつて、人骨、貝製品、土器について共同研究を進めました。偶然ですが、そのメンバーの半数が最初の発掘を行った先生方ゆかりのある若者です。今回の研究では、九州大学総合研究博物館、九州大学アジア埋蔵文化財研究センターに全面的な協力をいただき、土器の分析では、ウィーン工科大学を介して新しい分析方法をとりいれました。共同研究の成果は熊本大学学術リポジトリで公開され、インターネット上で誰でも全文を読むことができます。(http://hdl.handle.net/2298/00043387)

現在、広田遺跡の成り立ちは、次のように説明されます。

今から1800年ほど前、鳥ノ峯遺跡などと同じ文化をもつ地の人々が、広田遺跡の北側砂丘に墓(覆石墓)をつくりました。彼等はすでに吐噺刺列島と交流があったようで、オオツタノハの腕輪やヤコウガイ匙を持っていました。その後、別グループの人々が広田に現れ、今度は南側砂丘に墓を作り始めます。彼等は複雑な彫刻のある貝符や、貝殻のビーズ、竜の形のアクセサリで頭や耳、腕周りを飾るといふ、それまでにない珍しい装いの人々でした。彼等は死者のまわりを石を置き、横向きの姿勢で葬り(配石墓)、しばらく後に骨だけを集めて次の死者とともに再び埋めるといふ二次葬の習慣をもっていました。北側に墓をつくっていた在地の人々も、南の砂丘墓地に加わったので、南側には覆石墓と配石墓の入り交じった墓ができました。彼等は日常的に緊密な関係だったのでしょうか。そのうち、在地グループの人々が、奄美・沖縄地域にでかけて、大きなイモガイやゴホウラの貝殻を持ち込むようになり、二つのグループは種子島に持ち込まれた奄美・沖縄の貝殻をつかって、共通のアクセサリをつくるようになります。

二つのグループは広田ムラで平和に暮らしていたと想像したいのですが、生きぬくのは容易でなかったようで、頭や腕、足に傷を負う事件も珍しくなかったことが、今回の調査でわかってきました。鳥ノ峯とも時に矢を放ちあうことなどがあつたようです。

それにしても貝符を飾って広田に後からきた人々はどういう人たちだったのでしょ。今後人骨のDNA分析が進むと、こうした問題にもメスが入ることでしょう。

若い世代にバトンタッチされた広田遺跡の研究は、これからも続きます。



♪ 野を越え 山越え 谷越えて♪



広田遺跡出土人骨の再検討



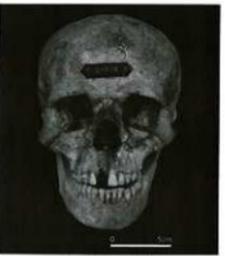
C-8号



C-8号頭蓋の陥没



C-8号右寛骨の骨折



D III地区2号

米元史織 1)2)・高椋浩史 2)3)・足立達朗 2)4)・岩永省三 1)2)・中野伸彦 2)4)・小山内康人 4)

1)九州大学総合研究博物館・2)九州大学アジア歴史文化財研究センター
3)土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム・4)九州大学比較社会文化研究院

日本列島に生きた人々の多様性やその成立過程を明らかにするために、1955年の発見以来、広田遺跡出土人骨は他に類をみない形質を有する人たちとして注目され続けています。木下尚子先生を代表とする科学研究費基盤B「3～7世紀の琉球列島における人と文化の交流史研究」において、これまで未検討のいくつかの問題について研究を行いました。

・外傷や関節疾患

広田遺跡出土人骨の中で最も興味深い特徴を示した個体はC-8号人骨です。この個体の右寛骨腸骨翼部（腰の右側部分）に骨折痕が、前頭骨の右側（おでこの右側）に陥没骨折痕（鈍器による外傷か）が認められました。ほかにも、四肢骨の全関節部で変形性関節症が確認されており、身体活動による負荷が他個体と比べて強かったと考えられます。

・ストロンチウム (Sr) 同位体比分析の結果

人の歯牙のSr値の解析から、生育地の異同を推定し、集団内・外のヒトの移動の有無を明らかにするSr同位体比分析を行いました。その結果、広田遺跡から出土した人骨は4つのグループに分かれることがわかりました。図1をみると、C-8号は緑色、D III-2号は黄色に属し、墓地形成の初期に属する北区1号（青色）とはSr値は異なりますが在地の幅に収まります。特に興味深い結果は、下層新段階において、下層古段階では存在しなかったSr値を示す赤色個体群が出現し、青色個体群が確認されなくなる点です。これは、婚姻や交易などによる交流関係の時期的な変化を示す可能性があります。本成果については今後分析試料を増加させ検討を加えていきます。

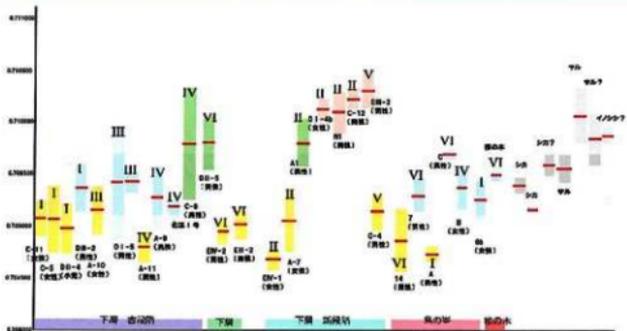


図1 ストロンチウム同位体比と木下 (2003) の段階区分との関係

赤線 : Sr値の読み付け平均値の中央値
黄色帯 : 島の骨牙のSr値から推定した在地の値
ボックス : 墓地 (A) の値
※各ボックスの色 (黄色・青・緑・赤) はSr値の近似するグループ

広田遺跡出土貝符の製作技術の研究

山野ケン陽次郎

熊本大学埋蔵文化財調査センター

広田遺跡で発見された人骨は、様々な「貝殻」で作った装身具を持っていました。腕輪やペンダント、大量のビーズなど、その数は4万点にのぼります。このうち「貝符」は、腕や胸元を飾る装身具です。イモガイの殻を丁寧に磨き、その表面に緻密な彫刻文様を施します。一体、この文様はどのようにして彫刻されたのでしょうか。

近年、貝符の製作に「鉄製工具」が使われていたのではないかという指摘がありました。古墳時代、種子島では鉄生産の明らかな痕跡は見つかっていません。鉄製工具の存在は、九州以北の古墳社会との交流を考える上でも重要です。そこで今回の研究では、貝符文様の彫刻技術の復元を試みました。

まず、貝符の彫刻を高精度のデジタルマイクロスコープで観察し、その加工痕跡の特徴を明らかにしました。観察の結果、工具の刃先形状を推測できる彫刻痕や「縁出し」「角出し」などの特徴的な彫刻痕が認められました。貝符の製作には丸刀や平刀、三角刀など複数形状の大小の工具が用いられていたようです。

次に、種子島産の硬質砂岩などを用いた石製工具と、鉄製工具で貝符を実際に作り、実物と比較してみました。その結果、石製工具でも彫刻は可能ですが、貝符に見られる「縁出し」「角出し」などの加工痕を明確に表現することが難しいことが分かりました。貝符は奄美・沖縄諸島でも発見されており、同じような彫刻痕が確認できたため、南の島々にも同一系統の技術が存在したことが分かります。一方で、広田遺跡ではほとんど見られなかった「浮文彫り」が多いなど、彫刻技術に地域的差があることも分かりました。

古墳時代、九州では権力者が沖縄など南の島々の貝殻を使った腕輪を欲し、交易で入手していました。鉄製工具はこうした貝を巡る交易の最中、九州から種子島に持ち込まれたのでしょうか。製作技術の研究はまだ始まったばかりで、これからの進展が期待されます。

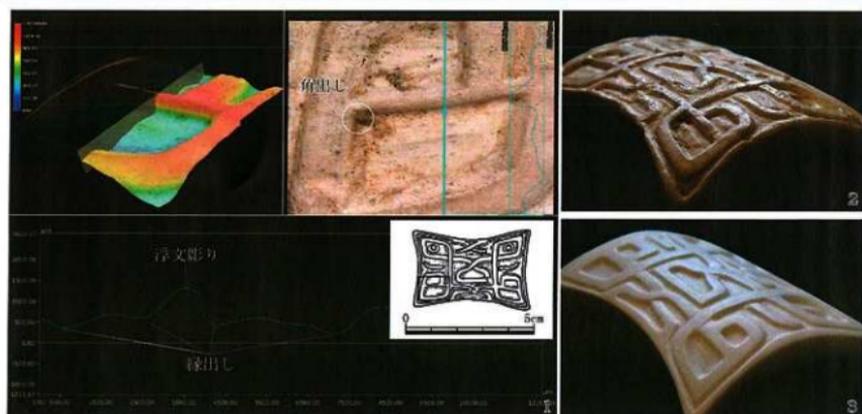


図1 1: 広田遺跡出土貝符 (T172) の3D計測データ画像 (実測図は桑原編 2003『広田遺跡』より転載)
2: 広田遺跡出土貝符実物近影 3: 石製工具彫刻レプリカ近影 (T172を参考に比嘉保信氏製作)

土器の型式や胎土分析を通してみた 広田人の移動痕跡

石 堂 和 博 (広田遺跡ミュージアム 学芸員)

具志堅 清 大 (沖縄県立埋蔵文化財センター 主任)

篠 藤 マリア (ハイデルベルク大学 准教授)

ヨハネス・シュテルバ Johannes H. Sterba
(ウィーン工科大学 Senior Scientist)

古代の広田人たちは、広田海岸の見晴らしのよい砂丘を墓地にえらび、サンゴを墓石とし、土器を供えました。私たちのグループは、これらの土器がいつのものか、産地はどこか、お墓にどのように供えられたのか、について研究しました。また、海を越え、トカラ列島や奄美・沖縄諸島に種子島でつくられた土器が渡っていないか追いかけて、両の島々に残した広田人のあしあとを見つけようとしてきました。私たちが研究のおもな対象とした墓に供えられた種子島産の土器を「広田人の土器」と呼んでみましょう。

「広田人の土器」は、3世紀から6世紀にかけてのもので、3世紀のお墓の中には南九州の土器と「広田人の土器」をならべて供えるものがあります。このお墓に埋葬された広田人は、トカラ列島にたくさん生息する貝（オオツタノハ）の腕輪を身につけていました。この頃の「広田人の土器」とよく似た土器は、トカラ列島の島々でも発掘されています。これらの土器は、南九州・トカラ列島との交流を物語るものです。

4世紀から5世紀になると、広田人は南九州の土器を墓に供える習慣をやめます。かわって「広田人の土器」をあらかじめ割って、その破片を墓に供えはじめます。この頃に、お墓に埋葬された人々は、奄美・沖縄諸島の海で採れる大形の巻貝でつくられた貝のアクセサリーを身につけていました。具志堅清大さんの丹念な調査によって、沖縄諸島の遺跡から、種子島の土器とよく似ているものが見つかりはじめています。また、篠藤マリアさんとヨハネス・シュテルバさんが中心となり土器の化学分析もおこないました。微量な元素の比率を測定し、数式にあてはめることで、土器につかわれた粘土の産地を特定する中性子放射化分析法によるものです。この土器の指紋ともいべき情報によって、小さな破片でも土器の産地がわかるようになってきました。

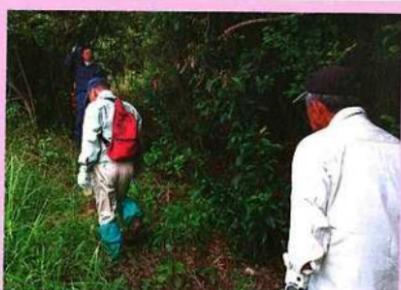
私たちは、これからも土器研究をつづけていくことで、広田人の謎を少しずつ解き明かしていきたいとかがえています。



新たな調査へ

～広田遺跡語り部の会の取り組み～

広田遺跡の大きな謎のひとつは、住んでいた集落が見つかっていないことです。そのため、どのような生活をしていたのか、どのように貝装飾を作っていたのか、その多くは分かっていません。そこで、広田遺跡語り部の会では、広田人の集落を見つけるための調査に取り組んでいます。昨年度は現広田集落周辺の田畑や山などを踏査し、土器を採集しました。今後も地形や湧水などの分布状況を調べるなど、調査範囲を広げていく計画です。今後の調査をご期待ください。



—— 広田遺跡語り部の会 ——

広田遺跡及びミュージアムの保存と活用を支援し、教養を深めて地域社会の文化発展に貢献することを目的として、平成27年の広田遺跡ミュージアム開館を機に発足しました。

広田遺跡についての案内役のほか、「岩穴」焚きや潮風呂のような民俗行事の復興、ボランティア清掃活動、文化財研修など楽しく活動しています。常時会員募集中です。興味のある方は広田遺跡ミュージアムまでお問い合わせください。



令和2年度 地域の特徴ある埋蔵文化財活用事業
広田遺跡ミュージアム開館5周年記念企画展

広田人と貝装飾 ～広田遺跡出土品里帰り展～

令和2年10月24日～令和2年12月20日

発行者：南種子町教育委員会

〒891-3792 鹿児島県熊毛郡南種子町中之上 2793-1

Tel 0997-26-1111

印刷：株種子島新生社印刷